

音楽祭は多彩に響く

2

小宮 正安

産声を上げた時、それは亡き国家の威信をかけたプロジェクトといった様相を帯びていた。

モーツァルトの街

ザルツブルク音楽祭の原点は1842年にまで遡る。この街が生んだモーツァルト（1756～91年）を顕彰すべく、その没後50周年——諸事情から延期され、実際には51周年になったのだが——を機に、彼を象った銅像の除幕式がおこなわれ、それと連動して数日間わたって音楽会が催された。そして、それまで故郷では尊敬されていたとは言いがたかったモーツァルトの再発見がおこなわれ、「モーツァルトの街ザルツブルク」というイメージが確立されていった。

以降、ザルツブルクではモーツァルトに因んだ音楽祭が時折開かれるようになった。それを恒常的な催しにする動きが結実したのが、1920年のことだ。1920年といえば、第1次世界大戦が終結してからわずか2年後である。この戦争での敗北をきっかけとして、オーストリアを中心に中央ヨーロッパに巨大な領土を数百年にわたって

賞 鑑 術

築いてきたハプスブルク家の帝国が崩壊。後継国家としてオーストリア共和国が誕生したもの、国土は著しく縮小し、敗戦国として莫大な債務に喘ぎ、かつて帝都ウィーンに花咲いた文化や芸術は風前の灯火と化してしまっただが、この状況を憂えた文化人がいた。ウィーンを傑作オペラを発表していた

代表する文学者のホフマンスタール（1874～1929年）と、当時ウィーン国立歌劇場の指揮者として活躍し、ホフマンスタールとの共作を通じて『ばらの騎士』をはじめとする傑作オペラを発表していた

R・シュトラウス（1864～1949年）である。彼らは、敗戦後の荒廃に晒された大都市ウィーンではなく、比較的被害の少ない山間の小都市ザルツブルクこそオーストリア文化の最後の砦であると考え、この地で夏の芸術祭を開こうと考えた。それゆえ1920年に催しが始まった際には、ホフマンスタールの戯曲『イエターマン』のみが上演され、オペラや演奏会はな

対し、ザルツブルクは——上演されるレパートリーのジャンルを見てもわかるように——多様性が特徴だ。それもこれも、ハプスブルク帝国のありし日に、国中の様々な民族や文化が集まってオーストリアの文化が作られたという矜持の表れであって、それを体現するのがヨーロッパ中を股にかけて活躍したこの街の偉人モーツァルトという考え方のゆえだった。

だからこそザルツブルクというローカルな街で産声を上げた音楽祭は、創設からさほど時を経ずして、ヨーロッパはもとより世界中から人々を集める国際的芸術祭へと成長を遂げた。スター指揮者のカラヤン（1908～89年）が、第2次世界大戦後にこのフェスティバルの重鎮となり、音楽プログラムを中心に国際的な発信を始めるよりもはるかに前から、ザルツブルク音楽祭は世界に開かれた音楽祭だったのである。

現在でも開幕にあたっては、『イエターマン』が上演される。とある金持ちが自らの死に際し、人生にとって何が大切かを悟ってゆくこの物語は、死の季節を経験しながらも今一度の蘇りを期したオーストリアの文化人の痛切な願いを訪れる者に伝えている。

（音楽評論家）

文化の多様性 世界へ発信

かった。音楽関係のものがプログラムに加わるのは数年後のことであって、さらに演劇も途切れることなく上演され続けた。つまりザルツブルク音楽祭は、正確に言えば「ザルツブルク芸術祭」であり、オーストリアの誇る様々な芸術作品を通じてこの国の文化を守ってゆこうという理念に支えられていた。

カラヤンが手腕

夏の間、小さな街に滞在して集中的に芸術と触れ合う。このアイデア自体は、当欄でも紹介したバイロイト音楽祭に基づいている。ただしバイロイトがワグナーのためのワグマン・フェスティバルだったのに

ザルツブルク音楽祭



ザルツブルク音楽祭の多様な公演を目前に世界から人が集る。©picture-alliance/アフロ